

【佳作】『ばあちゃんの給食』から

桜町小学校 平澤 薫子

昭和三十一年、ばあちゃんは小学一年生。学校に給食がありました。でも「給食のおばさん」はおらず、みんなのお母さんが、交代で給食づくりを手伝っていました。「今日は、母ちゃんが給食当番！」という日は、楽しく給食室をのぞきに行きました。もう少し年上の人たちの頃は、家でとれた野菜を持ちより、給食にしてもらっていたそうです。四年生の頃、「給食のおばさん」が決まりました。五・六年生になると、一・二年生の給食当番を手伝い、食べ終わった食器を洗って給食室へ持って行きました。

脱脂粉乳を飲み「ニンジンジャム」甘くておいしかった！肉入り野菜の煮物だったと思うけど、食べると肉の脂が上アゴにベトツとくっついたことがあります。あれはイヤでした。でも食べ盛りの子どもたちは、みんな給食を楽しみにして

いました。残飯は、豚を飼っている人たちが、夕方リヤカーでもらいにきていました。

これは、私の六十九才のばあちゃんの話です。私はこれを聞いて、おどろきました。まず、「給食のおばさん」がいなかったこと、もう一つは、下級生の給食当番を手伝っていたことです。今は当時より楽だな、と思いました。今の給食は、とてもおいしく、食器も清潔感があります。栄養を考えて、こん立をつくってくれる人達がいいます。嫌いな物が出ると残す人もいます。私は嫌いなものがん張って食べます。みんなもつくってくれた人に感謝し、残さず食べてほしいです。

ばあちゃんは、いつも言います。

「食べる事は、生きていく上で、一番大切な事。食べ物を大切にして、しつかり食べ、大きくなつてほしい。今の給食を食べてみたいなあ。」
給食委員の私からみんなにお願いしたいです。作ってくれる人、運んでくれる人、みんなに感謝して、給食を食べてほしいです。